





はしがき

早うはこやのとどがひめことゝてみそかに傳へ
いにし一卷は世に廣ううつしもてつたへなどし
てことに江戸の心しりの誰彼などがもとよりま
たねの夢にこれがつきをもとやうにせうそこの
たびくいひおこせなどすれどさてのちは夢に
もいり来ずはこやの山には聞きにいくべいやう
もなければくめあづみなどいふらんやうの山人
をだに得てしがなかのとどがりせうそこしてま
しと思へど猶たはやすうなしうまじかりければ



なんすげなうてとたりうごたれんものとはおも
ふおもふいくらのはなもみぢをが見すぐしけん
こととていほうの八とせといふむつきのついた
ちの日より十月五日といふ日までのあはひよご
とよごとのめをなん見けるは殊にとうそは
くさんなど神のおほみきのおろしきへありて急
はぬ夜はまれなればとじはおふなうをしへに
けれどかきひがめなどもやしにけんのち見れば
いふせうかたぶかるゝがちなれど彼のしりうご
ちびとゞもにみすとて人にもうつさせつればな

んいとゞおぼつかなうこそおなじうとくさばか
りのたはれものがたりながらにこたみはいさゝ
かやうかはりてなんありけるそのおほむねなら
の都のふるき手ぶりにゆげの道鏡がにひたま
らのみやごとをさいさきとして兵衛の佐きたふ
んの朝臣のをみなのくそをなめしといふせちな
るこひのぢらぬむるいに本院の侍従がふすまけ
がされしひとくだりありつくもがみのおうなの
ひきいれ聲のたむかりごとは在五中將の色ごの
みをちこづりしといふみなかうどのくちの石ぶ

みあればしら拍子の静の御のあづま下りに梶原
 の景時がよげひのかたゝがへせしふるき鎌倉か
 がみのうつし言葉もありけり入道相國清盛の朝
 臣と常盤の御はさゝめごとにならうありていはけ
 なき子ども命をいかしはう官義經御舟にまゐ
 りて女院のおんはだへ見たてまつりてよりなん
 あらぬむほんもおこすべかめる將軍川邊の臣は
 軍にまけてから國にとらはれたりしをいのちを
 ーさにその妻をまひぢひして我見るまへにて新
 羅人にをかされしかゞやかしさのあとうがたり

鼻もたげの僧都のよびくゝの睦言はしほちの若
 法師がかはつるみのたねとなりし宇治のさてい
 のかたりのこしなどもあなり兼好法師が筆すさ
 びの艶なるせうそこぶみも小夜衣のいましめを
 得やぶらで師直がおもひ寐の夢心地をや悩まし
 けん筑波山のかゞひのよは神のいさめぬざこね
 の契にこだいのひたちうたを今様にうたひかへ
 なども例のあやしうしどろもどろなるすぶろごと
 ともなりけりこれを見て笑はん人もあめりにか
 まん人もあめりそはとまれかくまれたぶかのと

じがいへりしやうはかうやうの物かゝんにたれ
 もかきぬべし早う著聞集などの如きいたづらに
 かくとのみ思ひてそのさましらぬなるべし見ん
 ずる人の心を動かして唯ならずけしきはまする
 だんたはやすからぬものにはありけるこの心を
 味はへてさてなんこのふみは見よとなんいひけ
 るさはれさもあらざりけらゝ

はこやのひめこと後篇

ならの葉の名におふ宮のふることのかくろへご
 とをさへなんたれ口さがなういひもて傳へて世
 のすきものどもの耳かたぶくるくさはひとはな
 れりけんかし佛の道をいみじうたふとませ給ひ
 てやんごとなき御身づから千人のあかながさせ
 おはしましけんきさいの言ばらにさへなんおは
 しましければこよなうもていつかせ給ふあまり
 によるづおぼん心のまにくゝおもむけ聞之させ

給ひしおぼん習はしのおとなにならせ給ひて高
 御座に昇らせ給ひ天の下のおぼん政きこしめし
 いるゝたふときおぼん身とならせ給ひても猶や
 みがたうおはしましけるなるべししかあるのみ
 にあらずいとほしうおぼんほとんやまひなんお
 はしましけるゑぐうおはしますにやあるらんま
 だよづかはしからずいはけておはしましけるほ
 どよりおよびもてかिसぎらせ給へりけるをや
 うやうにさぐりひろめさせ給ひてふたつみつよ
 つとおよびの敷を増させ給ふほどにはてくは

おほんかひなごめにさし入れさせ給へりけれど
 猶あかずなん覚えさせ給ふばかりのいみじうひ
 ろきおぼんほとんやうになんおはしましける女べ
 たうひくらうどやうのすいたわめるとちのおの
 がじゝのさゝめきごとなどをよろづにかへても
 聞かまほしきものにおぼしうらやみておぼんみ
 づからかいさぐりのみもえおはしまさざりけら
 ーよこはぎの大臣の同胞にて藤原の朝臣と聞え
 けるなんとのみつかうまつりけるかたちもかう
 ざくにいみじき色ごのみにてなんありければさ

るかたにいとようれんじてよごとくめづらし
 うまたなき手をいだいてみけしきとるに似なき
 ものにおぼしうたがうせたまふみたりごち
 になやましきもぞこの顔見ればなんやがてすが
 すがしうなどみゑまるゝをとごてさせ給ひてゑ
 みといふかばね賜ひなどして晝も猶御帳の内
 そひふ一夜はいつもくおほとのごもりすごし
 てあさまつりごとをなんおこたらせ給へりける
 あそんはたわかうさかりに勢をさくけおさる
 べうもなきをわざとをしめておぼんほがみのお

たりより手もてかいなでなどば物おもはせ
 奉りあるはあくかぎりつとさしふたぎながらに
 かき抱き奉りてたちてさしあゆみ御園生の花の
 梢どもに蝶鳥などのめをたはぶるゝを御覽せさ
 せ奉りなどひたものおもむけ奉れば若きごたち
 つきしるひつゝしたかひまみりておまゝよりは
 じめてめだうわたどのゝあたりまでもこぼしあ
 りかせ給ふをきぬもてのごひありくなるべしあ
 すか川とかやよはさるものになんありければか
 のもこのもに影はあれどおぼんうつくしみの

なみにうるほひし身も末のまつ山あふれそめて
よりなん朝臣がしうとくぶりはいたづらに下ゆ
く水となりはてにけるそれを如何にといふによ
ろの僧にゆげのそれがしとかやいふ法師なんあ
りけるおほとなぶらのかけにかしこみて侍らひ
けるをふとさしのぞかせ給ふにあやしうひぎの
みつあるやうになんありけるあれはなぞの物ぞ
とおほせごとありければかしこけれどをこの
もたるものになん侍るとそうにきくしらずめづ
らしうもあるかなさばけち急んにおぼつかなが

らずけぢかうて御覽ぜさせたいまつれとなんこ
たちしてのたうび出させ給へりけるをたがひ聞
えたてまつるべくもあらざりければやがてきぬ
なごりなうかいのけて手してとかうひこしろふ
にむくめくくいよふとやかになりもてきて
物々しうそぶろぎたてるやうだいなんものおそ
ろしきまでにかめしきかたちしてよのつねの
をばたちばかりも合せたらんやうになんありけ
るねびとだにあるをまいて若きごたちなどは
まほにも見えやらでつきしろふをうべくしき

顔持してこのものや何がしがためにはいみじき
 あたになん侍るわかう侍りしほどより人はかけ
 がけしうまかりかよひておのがじのすきわざ
 どもしありきつひのよるべとめなどもし侍る
 ものをかうなべてならずんようになん侍ればさ
 だすぐるまで女といふものはけちかうもならは
 ひ侍らず露よづいたるすぢしり侍らぬが口を
 うかなしさに法師になりて山ごもりしてなん侍
 りしさをかうおまへにとうでしめ給はするな
 んかこきものゝかつはこよなきめいほくにこ

そとそうせさせ給へとなんいふこれをきこしめ
 しつゝみそなはしおはしますにすづろけしきば
 ませ給ひておぼしのどめさせ給ふべくもあらず
 御帳の内よりまるびいでさせ給ひて世のおとぎ
 きもおぼし忘れてかたじけなうわがおほんほと
 におしあてさせ給ふに深山がくれの朽木ぢらね
 ばすくくしき法師心にいでやかしこうなどけ
 思ひもたどらでやをらおのれがはらの上にいだ
 きのせ奉りて下より御けしきとるに天の下の君
 とあふがれさせ給ふかしこきおほん身にもすぐ

ろくのさいとこのものばかり御心にかなはずと
 のみぢんおぼしなげいたりしをこれはずさしぬ
 らではすこしいざよひてあへがせ給ふばかりに
 ぢんあるを珍らしうもうれしうもおぼししみて
 めたけきおんぞの袖にも猶あまりぬべしかつ朝
 臣が何くれとなき手を出いてぢぐさめ奉りし
 ぢほかうやうの手ぶりに下よりそらさまにつき
 いるゝわざはまだしめさざりければ如何は
 といふせうおぼいたるをさこそは侍れかけまく
 しかりこき十善の君とおはしますものをぢにか

はたいぐしういやしきやつこが下におき奉る
 べきぢらねばなんかうけいゑいしてさゝげして
 つかうまつりけるとなんそうしけるよにこの手
 ぶりをまねび傳へたるこの法師よりとなく聞之
 いかうおくまりたる寢殿のはなちいでに兼好法
 師よびするてかうろいなんとせうそこあつらふ
 いでやとはにかまるれどすまひはつべうもなけ
 ればれうしとう出しめてかく

ぼしけつらんがうしろめたさにかうくだく
 しう聞え侍るをおぼしうとむなよおんわたり
 にもけちかうなれ聞えまみるとかこの下づか
 へに傳へそめ侍りてよりなんゆたのためたと
 かやかしば木の葉もりの神のたよりも忘れて
 見すもあらず見もせぬおん面影のつとそひ侍
 りてなんつめ忘れ難うかしこきいかきを何か
 はつみ得がましうといくたびかおもう給へか
 へし侍れど我心だにつれなうてやみぬべも
 侍らねばなんあはれとだにおぼしおこせ給は

んなん命ならまゝを見きとないひそとよしや
 のたまひつけさせずもあれ人の聞らんやうの
 山の井に侍らまゝやは人のころもはとか聞に
 るきなることしまくらごとのやうにてなん岩
 木の山にもしづくなん侍るをあたなみならぬ
 淵のさわぎにすこしはこぼれさせ給へかしむ
 さし鑑をうるさしとなおぼしはしたなめ給ひ
 そやかーこ
 となんすさびかいたるかうてこそはと魚みかた
 まけつよみかうがへて何がしの院の艶書あは

世のはんぎならんからに耳あたらしう目とまら
 じやはとたのもしうてすゞろにえんがりつゝや
 がてかの侍従しておんかへしをといはせたりけ
 れば上にひきたるすみをだにそこねずあだしこ
 とはなくてたゞ小夜衣とのみなんいひかへした
 りけるをとさまかうさまにかうがへてやうく
 に我つまならぬつまなかさねその心なめりとな
 ん思ひ得にければ法師のふんでもやくまじかり
 けりと心ひがくしうつきりにひきやりすて
 たるをまた拾ひ上げて

かへすとて手やふれけんとおもふには我文な
 がらうちもおかれず
 とよみてこの心みを顔におしあてゝなんほろほ
 ろとなきけるさこそいへどうつゝにはよ一つれ
 なくとも夢といふたのもしびともなきよかけと
 しひて思ひかへしてふすまをかへさまにしてか
 たしきふいたりいとせめての心なるべし我心の
 くねくしきは思ひもさとらで人のつらさをか
 ごとがましう恨みごちつゝこのこひかなはざら
 んには命も得いきたらどをたゞにやはしなんい

かきいろきをおこしてかやつがりおしよせ火も
 て焼かまし水にもやはめてんいな猶わろかめり
 かしうへのみけしきあしうよこさんずらんにい
 みどき罪得べかめるを其のたじろぎにぬすびと
 のわざとおしはせてこゝに思ふ人わたいてまし
 我物と永うしたらんによもつれなうはもてない
 たらじをよ一つれなくもなびけはてどやはさり
 やそやなど心にとひもしこたへもしてしげしあ
 るにうしろよりゆり動かす人あり誰そと見れば
 侍従なりけりやくなき事を聞えそめ侍りて御心

をわづらはしたいまつるなんいとかしこきさは
 いへど女のほんせうはおはくしうなびきやす
 なるものになん侍れば玉ざゝのあられ萩の露な
 どのやうにこそ侍らざめれど殿口のあたりなさ
 けなさけしうのたまひいどまんによも心づよう
 はとなん思ふ給ふるをいざたまへおんおくりつ
 かうまつりてんといふよみぢにてほとけにあひ
 たらんよりげにうれしくてやがて引かれて忍び
 ゆきたればゆひきやにゆあむるほどなりけりさ
 うじのおけひよりかいまむるに總身はめゆひの

きぬないがしろに着せしむぢのあたりばう
 ぞくにひたつけたるをこゝに人ありともしらぬ
 なるべしやをらぬぎすべしめてゆまきも何もかい
 やりたればおほふべきあたりもけん急んにてし
 ろうふくらかにあぶらづきたるほがみむかも、
 などいふ處々なごりなう見之渡りて今ぞやうや
 うゆぶねにはいるこれをのぞき見る心地けあが
 りて物もおぼえず身もわななかれて常はあなづ
 らはしうきほならずと見る侍従が尻にもかきつ
 かまほしうさへなんおぼえたるをござとうほそ

+

めに障子おしひらいてをふのうらなし御心のま
 まにとそびらひとつみでおしいれられたる物
 のくるはしまでになんすぢろはしくておびと
 ききぬぬぎもあへずもるともにゆぶねの内さま
 ろび入りたればさうじみはまことにゆくりなく
 てのがれぬべき暇だになきむくつけわざを流石
 にまさなう聲も得たてずとかうすまへどほとも
 なきのぶねの内さまにせまりたるが上に我も人もあ
 かはだどちなればこれかれするはしにおもほえ
 ずめのうるほひにてぬれ、とさし入られつ男

はころもひとへもうとからぬをあく事なうなん
 おもひける如何に聞しれるにかあるらんいとあ
 わたゞしきあしおとしてつと入くるは主人なり
 けりあはやと見るまにひぢもちいかめしう太刀
 かざして額際をはたと斬られにけりあやといふ
 こゑのみづからの耳に入れてふとさめたれば夢に
 なんありけるなほわが膝をいだきしめてあせも
 すとゞに下ひものひたりてふすまさへなんけが
 れたりけるもをか

むかあやしの夢語をして在五中將につくもが

みといはれたりしをいみどう嬉しと思ひしみた
 るおうなまた二郎にたばかりけらくまことやま
 しがこらへしやうによき男は得たれども猶あひ
 見ぬなんあかぬ心地せらるゝをこたみはまのあ
 たりおんかへしうけたまはらばやといひてこの
 歌たてまつれまろがねは山のせんじのすぢを傳
 へたなるにましがおほぢのいたうすい給へりし
 おん口つきをならはひ給ひたなれば何かはもの
 めでする君のおん目にとまらでやはそのをりに
 たばかりてまうさんずるやうはぢちには何がし

がいもうとぞん侍るはやうこふのかみのめしう
 どにまうのぼらせおきてぞん侍りしこのほどさ
 とみして母にかはりてぞん侍るといへ中將のお
 んごうごきぬべしいでやとうくとさうのかし
 聞えてくらきまぎれにめてたてまつれ若きこわ
 ねまねび出してをこづりてんといふあなかたは
 やとはきけどうつくしび深き心地には得かへさ
 いいぢきぬなるべし中將がりまゐりてまうせと
 さふらふはとてありつるうすやうとうでゝかた
 のやうにまねびたればいとようたばかられにけ

りあまえたる香のするみちのくにがみに
 小夜ごろもよーやぬぎてもかさねてもみやこ
 のきぬはあやにきまほー
 とぢんわなゝくく手はいみじう古代めきてい
 とづしやかにかいなしたる歌のいといたうすき
 がましきは如何なる人さまにかあるらんふんで
 のわなゝきたるはあまりに心げさうしてわれに
 おぢたるにやあるらんなど思へばさすがなるこ
 こちもするをいざくとひかれしてゆくにさし
 も遠からぬあはひなれども路すがら田のくろに

てめぐりにははりの木どもたかりついでかと思
 ればさはあらで木の枝にいながらなんかけなへ
 たりける家はむねくしうちかやもて暮きてい
 なぎなどいふ物なるべしいくつともなうあるあ
 はひをとほりて前裁よりしのび入るに障子はま
 れにてくろうすくけたる板戸がちなりあじろ屏
 風のこなたにあぶらほの暗うてたてりこゝより
 ぞ二郎はいにけるもやのかたにわらといふもの
 ふすぶるにやあるらんあやしき香のたちみちた
 るにたゞ此方にのみわざとがましうえびの香く

めらしたる得も云はぬ香にかをりあひてまだな
 らはぬけさう心地ぞするや奥まりたる板戸のか
 げにしはぶきのおとしてかゝるむくらの宿にし
 もはひわたりおはしまいたる嬉しさはひしきも
 の、袖にも得なんとうちかすりたるこわざまの
 いたうあまえたるながらにあやしう齒をさるゝ
 やうに聞なざるゝはもしは舌つきのたみたるけ
 にもやあるとまづむねつぶれてむくつけゝれと
 かうやうのわたりぞかしおもほえずはしたなう
 ていとなまめいたらましかげまたことさらにも

こそとねんどてえびのかをしるべにあめみよれ
 ばくらまぎれよりふと袖を捕へてひき入れにけ
 り手ざはり何とかやしわみてやせうに骨の高
 かんなるは如何なるにかとおもひまどふはしに
 いとぢれがほにひもときなどしてひたものそひ
 ふすなるべしきこそいへど男もかうなりてはた
 だにやみぬべきにしもあらねばしたものあはひ
 より手さし入れてひなさきのおたりかいさぐり
 つゝやをらはだふれていきほひまうにつとさし
 ふたがんとするにあやしうたゝなはりてぬらぬ

らとしもいらぬは猶まだかたなりによづかはし
 からぬけにもぞあるとおめびもてつさしぬりな
 どやうくしにさしぬきするにしばしこそあれや
 がてかわきてあぢきなきこゝちもするをさうど
 みはひきいれ聲してよろづさしすぐしことよが
 りつゝうぢじにまとひむかもゝにさしはさみな
 どしていみじう心をやるなるべし男もけあがり
 てとかうするほどこそありけれやうく我にか
 へりて見ればよろづ疑はしう手ざはりに心をつ
 くるにしわみたるほゝすりよせて口さしなむる

舌つきのよ、みて齒なんかなしう落ちたりける
 ねたうもたばかられにけりとくやしうもをこが
 ましうも思へばあきれて物もいはれずへんぐ急
 などにとりこめられたらんこ、ちのするを猶い
 みじうしたりがほにこちより給へやかよわくぞ
 おはするまだ數とりにもたらはぬものをかうご
 もちのたけからぬは御心のあさくなんめりなど
 いふく手まさぐりにとらへて自らほとにおし
 あてなどひこじらひもてさわがる、ほどいよ、
 しづまひてふようなめるを猶むごにはなたぬな

るべし

ちひさきおん手を合せたまひて天照大神にまか
 りまうしせさせ給ふを二位のあまぜかきいただき
 奉りて紅の袴ふみしだきとつかの劔をわきばさ
 みもてふなだに立ち顯はれこの浪のあなたに
 はめでたきみやこのさふらふぞみてたいまつら
 ばやとそうしもあへず千尋の底にかづき入らせ
 たまふにおくれ聞之奉らじとやうくにみさり
 出おはしまして同じうまるびおちさせ給ふ女院
 の御袴の浪にたゞよふを源氏のものゝふども目

さとに見つけてくまでといふ物もてあさましう
 ひきあげ奉るにやうくしにいらせ給ひてうつ
 しふもぢうおはしますを眼つぶらに鼻がちなる
 をのこどもあらせなうもてさわぎて火してやあ
 ぶらん水たみさて奉らばやどかーがましうさ
 うどきあへるをばう宮きゝつけてあなかまたま
 へかけまくもかたじけなき天の下のこくもにて
 なんおはしますものをまうとらがけしう見え
 奉らんだにかしこきわざなめるをとはちふきや
 りて猶いきのこりてふなぞこになきふいたるふ

るごたちにかうくとあつうへつけておましひ
 きつくろはせおんぞたてまつりかへさせなごし
 ておんぬまぬりなど葛に心を用うれども猶いき
 いでさせ給やまじかりけりとごたちのなきまど
 ふにつらくこれをおすしのみみどもにかうか
 へ見ればおほかた人のおぼれたらん火もてあぶ
 りたらんなん命いくまじかりけるいきはだもて
 じねんにあたゝめんなんよきとこそ見えたれお
 もとたちに任せはてたらんはたいとおぼつかな
 きをなめくもみづから見とりたいまつりてこそ

とはう官ごたちにもかはりまみりておんぞゆる
 るかにし奉り氷のやうなるおんはだへを御腰御
 あしとぢうまみりつゝ我手のあたゝまりをやう
 やうにうつし奉るべう心のうちにはいかでこの
 きみいけ奉らせ給へとあらぬるしんぶちを念じ
 てしばしあるおひだにつめたかりし御はだつき
 のすこしぬくまりおはしましうと一こゑうち
 うめかせ給へるうれしうかたじけなきこといふ
 ばかりなしさはれ猶夢うつゝともわいだめさせ
 給はず人心地もぢうおはしましなうにさむう

つめたくやおもほしめすらんひたものよりそひ
 おはしますかこころそらおそるしきまでにはお
 ぼえたれど御命のためには何かはと思ひ起して
 我ふところにかきいだき奉れば御心地よげに何
 心なうね入らせ給へるおん顔をひとりつくぐ
 と見奉ればかつらの御まゆあをうつやゝかにて
 春の月の朧としきおんまなじりのにほひやかさ
 御ひたひつきあてはかにらうたうおんぐしのか
 かりわらゝかにてこぼるゝばかりにあいぎやう
 づかせ給へるなべてのよの人間のたねとしも思

はれずよりくおびえてひそめさせ給へるおん
 眉のかをりいとゞ似る物なうおはしまして吉祥
 天女にたぐへんにはほうけづかせ給はずあめわ
 かみこなどまうさんも猶あめの香おはしまさね
 ばこれやかゞやく日の宮の此世にふたゝび出ま
 うでさせ給へるにこそはと見奉るにもかうけぢ
 かうてふればひ奉るわがすくせさへあやしうか
 たじけなきにつけては天の下のますらをのちよ
 ろづのかたきともうち靡けたらんも何にかはせ
 ん天日嗣も何ならねど我物となうせさせ給ふお

ん過世につきてぞ高御座も羨ましうおふけなき
 心だましひしおくめるをいとゞあやにくにねい
 らせ給へる御夢心地に院の御傍にそひふさせ給
 へりとや御らんせさすらんひわづなる御手をの
 べてうなだにまとひつかせ給ひてすりつけさせ
 給へる御はだへのやはらかきに何とかはたへし
 のばざるべき下紐のうちには火のやうにこりなり
 て身もいとすゞろはしきままでに覺めれば今はか
 うぞかゝあまつ御國つつみを此身ひとつにうけ
 得たらんにも何ぞは露のとひたぶる心を起して

かの火のやうにも之たちたるをやらおしあて
 奉ればいよゝすりつけさせ給ふ御むかし、のあ
 たりぬらくとらうがはしきをおしひらめて
 見奉るにしろうつぶくとして黒きすぢのあさ
 あさとむらさきだちたる色合の得しいはずよき
 ほどにねびと、のはせ給へる御ほとやうに我顔
 のならんやうをもわすれて口よりつをたらしつ
 つおよびもてかいさぐりのみもえあらでやがて
 あぎとさーよせて舌もてめらくとぢめうごめ
 かすにけしきはませ給へるにやあるらんおんみ

づから御腰をもたげさせ給へるかたぢけなさに
 今けしげしもたふまじうなんりにければあふ
 むけふせ奉りて身をおしにつとさしふたぎたる
 きしろひにあとさけびてやうく人心地になら
 せ給ひにければおしほえずあきれまどはせ給ひ
 てこゝに人のとも得のたうびやらでわれかのみ
 けしきしておはしますおんおもやうのいとばら
 うたう此まゝにきえもはてぢばやとぢん
 亂れたる世のたゝすまひばかりあはれにはかな
 うかなしきはあらざりけらしあるは昨日は勢ま

うにかちほこりしも今日はあへなう身を亡ぼし
あるはつかさくらあいみじきも賤しきやつこが
従者となりへつらひあしたにむつびろはしてめ
ふべにあたみ戦ひなどもすめりいとはやうより
まぬりつかふる西のみやこぐにどものあるがな
かにくだらは心おだひくしうしらぎぢんねど
けてこはかりける其こきしどもかたみに軍を起
して入りみだれあたまふ式島のかなさしの宮に
天の下しろしめし、おほんまのほどになんあり
けるわがおほみかどにうれへまうしてすくひの

十

軍人たまふ將軍たれかれこゝらの軍どもをみて
まかりて神のおどろくしうなるらんやうにつ
づみうちはためかし虎のあたま吼めらんやうに
くだ吹きならしてさ、げたる旗どもはける野や
く火と風になびきいはなつ矢は冬の深雪のふり
しきるやうにつむじかぜの勢見せて攻め戦ひに
けりさこそいへど勝つも負るも軍のならひにな
んありければ大伴の連の手はこまの軍人どもを
せめぢびけてつひにその國の宮の内をさへにお
ひおとしたりけるを川邊の臣が手につきたるた

れかれは新羅の軍人にたゝかひまけてあへなう
 將軍ごめに捕はれにけりそれが中に調のきしと
 いひけるなんとりこめられたるながらに猶心の
 たけかりければ新羅人にくみて劔をまなさきに
 さしあてつゝはかまをぬがせ屍を我がおほやま
 とのかたにさしむけさせてさてなんをしへけら
 くはやまとの君わが屍をくらへといへさらずは
 いのちとりてんといひておどしにけれどしらぎ
 のこきしわがしりをくらへとのみなんいへりけ
 ればつひに斬られにけりそれが女をおほばこと

となんいひけるとともに捕はれみて
 から國のきのへにたちておほはこはひれふら
 すもよやまとへむきて
 とよみていみどうなきければ心をきえびすども
 もあはれがりて涙こぼしにけりさるをこの川邊
 の臣のいふかひなうしれづしきやはぢしらぬ
 をこものなりけりこれもめをとるとりこめら
 れにけるを新羅人ろうじてあそんやめといのち
 といづれをしきと問ひたりければ何かはめのひ
 とりを大切の命にやはかへましとなんいひける

さらばあそんが今見る前にてまるまぐはひても
 てあそびてんとなんおもふは如何にといへば命
 をだにいけたまはらましかば見てをしのばんと
 いへりけるなん人わうへなりけるしからんには
 とて男の見る前にひきいでにけり女はあきれて
 泣きまどふをあふむけふせてかたへの軍人に手
 と足をひだりみぎりにおしひらめさせて衣など
 もかいやりにければほとのおたりもあざく〜と
 けちゑんに見えわたりてそれだにいとなん心ぐ
 るしきをしらぎ人の黒う毛のおひてこちぐ〜し

きはだつきもてあゑかにひわづなるしるきむか
 も〜におしすりましたがりていかめしうたけぐ〜
 しきをひななきにおしあてつゝおよびもてかい
 さぐりなごしげしもてあそびあだえやをらふか
 うさ〜ふたぎまたぬきはなちなどしてわざとく
 まなう見ゆらんやうに心をやりてたはくるきの
 ふまでは我物とれうじてよひく〜にきなんあり
 しものむとねたう心やましう見つゝおもふもか
 ひなし心のめくかぎりもてあそびはてゝ今はや
 うやうはなちもぞやると見ればさはあらずてこ

たみは女のまぐらのかたにいみじきかちたきく
 ゆらしあやしき薬をほとうちにしぬりてな
 んしばしやすらふゆめうつともなう泣きふい
 たる女もこの薬のけにこちときめきもやすら
 んしりうごめかしても、のあたりぬらくとほ
 とばしり出るゆのながれひたるをさしうかび
 見てまたそひふして勢猛に深うあさうさしぬき
 するにたへぬにやあるらんこたみは女のかたよ
 り手足をまとひいだきしめて屍もたげなどとす
 めり死出の山をももるともならではこめともこ

さじと契り聞えし我うつくし妻のあたしをとこ
 とむつれあひてほしすりよせなどするをまのあ
 たり見きくこち今ころされんとする命をも忘
 れてくやしうかきつかまほしかりぬべきをとあ
 さましやうくにぬるされにけりまづ何よりも
 我妻得つとうれしくてやがてよりそへりけるを
 女はこよなう恨みふづくみであるまじう我身を
 うりていみじきはぢ見せたまひつればなんさら
 がへり何かはとけしうもてはなれてけぢかう
 だによむざりけるなこことわりにいとほしとこ

そ
 兵衛の佐さだぶんの朝臣あざ名をへいちうとな
 んいひける天の下のいろごのみなりけりこの人
 にもいのひかけられてはなびかぬ女はなかりけ
 るをそのころのみやづかへびとの中に本院の侍
 従の君ばかりなん年ごろ懇にせうそこかれども
 たゞつれなうのみもてないてさいはてにはふた
 たびみたびもいみどうたばかりるうじてもの思
 はせたりければいとゞやるかたなうねたさかな
 しき限りなれば病にさへなりてあつかはしう

なやみにけり繪をいとようかきければつれづ
 ながさめがてらかきけるやうかのせめてはこの
 文見つとばかりのふたもじをだに見せたまへと
 いひやりたるかへりごとによがてその見つとだ
 にかきてやりつるふたもじをやりとりてうす
 やうにおしつけておこせたるををこの見てさ
 めざめとなくさまをかいましまた五月雨のかき
 くらふる夜わざと我つぼねにしのばせおきて
 ほそやかなるがしらつきひや、かなる髪のか、
 りなどまで手ざはりにさぐらせてこゝちときめ

きみさまでのちへだての障子のかけがねをさ
 してこんとてたちてそのまゝにかきけち入はて
 たるを男さうじによりかゝりてたちて見みて見
 もの思ふすがたあるはしみどうおもしわびてせ
 めてこの女のはこしたらんをぬすみて見もしか
 ぎなどもしたらんはうとましかりぬべしさてな
 んこのおもしひやめてんとおもひてひすましめ
 かうぞめのうすもの、つゝみにはこをつゝみて
 して出たるはばひとりて見たればしみどうかう
 ばしくて中に丁子の煮しるとくるぼうをまるめ

ておよびのおほきさにしたるふたつみついで
 なんありけるこれを見るにこゝろもきえぐと
 ざりてこの水をなめこのものをろひかきてほろ
 ぼろとなみだこぼしたるさまなどもなごを細かに
 かいなしすべてこの人にふたゝびみたびたばか
 られろうぜられたるあるかたちどもをうるはし
 うさし繪にものしておくのかたに
 かゝるときにや人はしぬらん
 とかきてひとつの繪まきてうじ出にけりかの侍
 従はものがたり繪にいみどう心入れたるを早う

聞しりにければわらはにつきてかうやうのしもの
 なん侍るごらんせられんなんめいぼくならま
 おんわたりに今めかしきも侍らばこゝにもすこ
 し見世たまはらばやとなんいはせたりけるを猶
 すげなうもてはなれてこのほかにはよづかはし
 きすぢのものなどはもたらねばなんとて竹とり
 のおきな物語をおこせにけり竹の中のかくや
 ひめの帝のおほんおもひにもなびかざりけんを
 思ひしらせがほなるもつらうねたきことかざり
 なりひたものつれなきのみにしもあらずせめて

思ひとまらんとおもふをさへにさまたげてかう
 はしたなめろうせらるゝなんおもへばいとこそ
 にくけれよ〜今はこひしとおもはれどもまた
 この思ひやめんとせじいみじきはぢ見せてこ
 のむくいせでやはとうけはしう思ひかまへてわ
 ざとしばしおともせずなりぬかのひすましとい
 ふは年のほど十五六ばかりにてやうだいをかし
 げにけはひとてなしもめやすくけしうはあらぬ
 が髪はまこめにすぎたるほどにてなで〜こがさ
 ねにこきはかましとけなげにひきあげてよりよ

リつぼねを出入るをうかゞひありきて物くれな
 どやうくにならばひてものいひよりにけり年
 よりはませてなんありければ我物とれうじての
 ちにこれをつぼねにもてゆきてかうくいへと
 心を得させたればやがてもてまゐりてみあれの
 ぜんじのおんもとよりかうやうの物語繪ごらん
 せさせよとなんといひさうておきていにけりさ
 うじみは燈臺の下に文よみであるほどなりけり
 なぞのものぞと取りて見るに螺鈿の軸にらのへ
 うしして紅のくみしどけなう結びたれたりつれ

づれなればいとゞめがしうてやをらあけて見た
 れば男女のぼうぞくにむつれあひてねたるすが
 たどもをいとうるはしうかけるなりけりおとほ
 えず我顔のあかうなるこちしてやがてまきを
 さめんとしてまた思ふに人の見んずらんにこそ
 はみぐるしからめこのおくにぜんじのおもとの
 せうそこなどのまきこめてもぞあるそれもゆか
 しきにとまたおしひらくにおほふべきあたりも
 おほはでひたものなびきあひ口さしなめおよび
 をひぢさきにおしすりぢとくさぐの手ぶりと

もをいけらんやうにかきてそれが言葉どもをさ
 へにかみのかたに物したるをよむとはなしにひ
 とりつくづくと見してゆけば何とかやこちの
 あやしうなりてけあがるにやあるらんかほあつ
 くかしらおもしきこちぞするやさうじのとに衣
 の音なひして人のさめくやうなるを怪しとき
 けばおんことやらうたくぞあるや此手をこへ
 さままとひてなごいふはへいぢうのこ急なりま
 づおねつぶる、にかうなれ聞之侍るをおひだち
 なしとやおぼしうとまんとはするゆるいたまへ

やといふはひすましなりけりさてはわがすげな
 かりしにものごりしてかたらひつけるなりけり
 とおもへば身のよそならぬこちもすればなほ
 聞さし難うぬさりよりてかたぶきをりしはしは
 しづまめきて枕のみらんきしめきたりしをやう
 やうにいきざしあらましうなりてひたノとも
 の、おとさへするをひとり聞ふいてはさすがに
 なまけやけうあぢきなきこちのすればふすま
 かづきて耳さしふたぎつ、きかどとすればいと
 どあやにくにかへり見らる、ふよわやぬくり

なうかなたよりさうじおしひらいて入りくるや
 うなれば如何なるにかとむくつけくてやをらす
 べりのきておくふかうかくれにけりへいぢうは
 のどろくと入来てもぬけのふすまにしそくさし
 てうちかへし見るに腰のあたりすこしひぢてけ
 がれにけりこれを見てなん急みかたまけてまか
 りにけるさてつとめてよべのおんけがれのれう
 にとてきぬふたむらばかりおくりたりけりいか
 に彼の人のはづかしとおもふらんいみじきむく
 いしてけりとなんいひをりけるをこめいたるあ

そんなりけり

入道相國常盤の御を得ていかでなびけんとおぼ
 しなやむにいきほひもてせまりたらんは釋迦佛
 になまいをもくはせつべかんぢれどをかしか
 らずやううにおもむけてこそはと御心をなが
 うしてあるは花の宴に侍らしめておほみきいた
 くしひぞしあるはわたくしの月のまとみにこと
 さらに夜を深して酔ひておんかたまぬりおんお
 しまぬりなどして尻つみなどけしきばみ聞えま
 たはこちぐしういかめしきものふどもの手

にわたひていみじうおそろしとおもやらん事ども
 もを見せも聞かせもしなどいけみころしみをこ
 づりさいなむをんなはた人しれず愚ふ事などや
 あるらんひたぶるに心ごはうのみもてないた
 らずつれなうはしたなきさまなどは見せずて同
 じうおんあしまるるにも手ざはりやはらかにな
 れ聞え手をとらへられてもかなぐりはらはんも
 のともおもひたらずすこしそばみて袖もて口お
 ほひしつゝ笑みてしり目に見おこせなどさはら
 ば落ちぬべき容體して流石に心はひたやごもり

にとねの川水そこすみでなんありければいとバ
 なやましう物おもひぐさになりてともすればい
 でやとひたぶる心もおこらぬにはたあらねど猶
 ほどようかいしづめて雪のなよ竹とこちふく風
 をのどくしうまちわたればいきほひまうに天
 の下をまつりごち聞ゆるだいに相國にはいと似げ
 なうなんおはしましけるに小松の内大臣の熊野
 詣のおんかへさよりおんこゝち例ならずなやま
 しうせさせ給ひにければ此ほどおほやけのおぼ
 しわづらひぐさにていみじきくすし高麗唐土

まであんあさうせ給へりける其こまうどのもて
 まうでこしいとあやしき薬なんありけるさ、や
 かなる銀の壺ひとよろひにもりたるをなんくね
 くねしきえびす心もおのれやんごとなう用ぬ
 らればやのしたかたに鴻臚館にしたしう出入る
 げんばのかみして入道殿にまひなひたりける鳥
 けもの、ほえけんやうに雲とせり雨とせりて女
 の泣くといふ薬なりけりこれを得てぞ笑みかた
 まけていと嬉しとなんおぼいたりけるよるにさ
 へなんありければやがて例の常盤の御まうのぼ

らせておほとのごもりつ、おんあしまるなる
 べしおほとなぶらとほくえびの香くぬりみちた
 り何くれともよひて手とらへむなぢかいなでな
 ど例のあだえそぼる、はしにかのくすりをおよ
 びにさしぬりてむかも、のあはひにおん手さし
 入れ給へりまだかうやうのけぢかさけならはざ
 りければむくつけくても、をかたうしめてすま
 はんとわぶるをこれかんにしてやうくにおよび
 をとけてひなさきのあはひよりさしぬり給へり
 けり女はさるやうありともしらねば手放たれた

るに心おちみてゆくりなうたゆめられたるをば
ぢらふなるべしそらおぼめきしてつれなうづく
りまつにやうくほとのうちにいるほひほとび
てけあがるにやあるらん耳ほてり顔あかうなり
てあやしきこゝちもすべかめるをなほしひての
どめてやちら御手さし入れこゝろみたまふにこ
たみはむがもしにはさみさへんともせずかなた
よりすりよるはだつきのぬらくと湯のやうに
湧き出ひたりて之も言はずたふまじきおんこゝ
ちせさせ給へばそのまゝかきいだきておんふす

まの内にひきいれくちさしなめたまふにほとは
火のやうにあつうなりてしろうこえたる手さし
のべてにぎりもてみづからさしいれなどするら
うたさ言はんかたないかめしうふとう長やか
なるをかみのかたに下のかたに浅くさし深くつ
きなどれんど給へばしにかへりよとぞなく男
も今はけあがりてよるづうちわすれひたつきに
つきいれたまふをわが腰の上にかいのせながら
すこしそばみで數ならぬ身をかうおもほえずと
きめかしたまはするにつきそはまたひとつの物

なげかはしきなん侍るやといひさしてさめぐ
と泣くにいさ、かおしむきのよそになりていま
さかんずらん花の嵐にちるらんやうのこ、ちも
すればそばなぞの事ぞわがおもとののたまはん
ずらん事何にまれたがへどとなん思ふをなへだ
て給うそやさばまうしこ、ろみ侍らんいつぞや
あらましきもの、ふどものかいさらひもていに
侍りし乙若はつひには命こ、させ給はんとやす
らんそれを思ふ給ふればなん今かうなりても心
のためみ侍りてといふく、おんかひなの上に涙

をほろくとなきこぼせばいであなようなざる
くさはひは入道がまうさんずることおほやけに
よもかへさひいなませ給はじこよひのむくいに
命いけてんない給ふなくくしいたうないたま
ふなさは命いけて給はりぬべかなりやさうけ
給はりてこそはこ、ちときめき身もとろ、ぎて
と尻もたげうぎめかしてかたとこしとに手足を
まとひつけてひたといだきしむればようぞある
やかうてこそは今なん心もゆきはつべうとうつ
し心もなうさしぬきするをまたひきそばみてな

ほ今君のはべるものちかれはころさせ給はんと
やすらんげにさりや殺してましくいであまさを
なうぞおはするやかれはいけたまはらじとにや
侍らんげにさりやいけてましくよるづおんこ
とのまにまとなん

はう官の都落より世の中更に物さわがしうなり
て其心よせのあるかぎり焼野の雲雀床を失ひて
雲井のよそにたち迷ひたらんやうにかなしきめ
こどもにおくれ聞之思ふ男にすてられなどあは
れにはかなうまどひありきける中にごんの北の

かたと聞えけるなん殊にゆしうあへなくも母
とじがり忍びにけるを諸共にとらへられて鎌倉
にひきもていだされにけりこの静の御やよにと
どろけるかたち人になんありければ鶴が岡の垣
間見より大将の御心動きにけりそれをばなす
きならでとおぼしかまへてうへはつれなう操つ
くりてなんいまそかりければいとやるかたな
うなんおぼしあくがれにける男のつみにことつ
けておどろくしうめみやぢぐひにかこませも
し物やはらかにいまやう歌はせなどよりくお

まへにめさげていけみころしみちこづりさいな
まるいとわびしかりけり男のありかさぐらん
のみこころにて

陸奥はおくめかしくやおもほゆる壺のいしふ
みそとのほま風

とうらどはせ給ふにまこと知らぬやうだいにな
んありければかんざしの玉のいとさやかなる
に殊更にちひさう文を結びつけて
ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらば今
よりあはれとおもはん

とらんほのめかー給へりけるを猶そらおぼめき
して

みよし野の山の白雪ふみわけていりにし人の
あとぞこひしき

ともてはなれたりけるをまた
ながれては妹脊の中もたつといふよしの川
のよしやよのなが

と思ひしらせがほなるもにくければかへりて
しづやしづしづのをだまきくりかへしむかし
を今になすよしもがな

あべい事はたとやうにつきりなるをさば如何
 にいふともとねたうもくやしうもおぼししみて
 はしうねきほんせうの大將になんおはしましけ
 ればよしさもあらばあれこのはるけどころなか
 らでやはとよのおとぎはおまへにひきすゑて
 かうべはぬといはせて手をうしろさまに木にゆ
 ひつけてあしをさへひだりみぎりにおしひらめ
 させてじちにはひたぶるわざせん御心なりけ
 るをこの北の方はた物ねたうおぼすくせなんお
 はしけるをうへにはくちぎよう君はう官におは

しまさましかばわが身人のためにあはくし
 らんものとやおぼすことわりめかしうより
 そひてさふとはなしにおん手をとらへて袖の内
 にひきいれたりければかのひたぶるわざせん御
 心のもよひいとばはやりていふかひなうなえ
 なえとなりてつゑに御帳の内におぼとのごもり
 にけりきたのかたの御心しらひもてこのまぎれ
 にはなたれにけれどなほ何がやつとかやいふ所
 におしこめられてなんありける鎌倉やうのわか
 うど共のほのすいたるとちこれを聞きつたへて

おのがじ、ゆかりを求めてすゞろにせうそこの
 りいそのせんどにまひなひなどすべていろこの
 みのごち惑はすくさはひとなりであるはやうな
 きまへわたりをしあるは人わるうかいまみなど
 するしなき戀にまどひありく中に景時すけつね
 などいふわかうどなんもてなしやうだいもかい
 なでならずいみじきすきものどもなりければ人
 におくれどこちなからじと物うちいふにもなだ
 らめてわざとえんにもてつけなどしてこのわた
 りのしのびありきはおほやけごとよりもだいじ

ともてさわぐほどにやうくにきなれて物ごし
 ならずものけ給はりけちかうてたいめ給はるば
 かりになんなりにければあがためしにあひたら
 んよりも嬉しくて何くれのうしろみをしよろづ
 のざうやくまつとめなどたゞわたくしのしうと
 もていつきにけり酒者もたらし來ておのがじ、
 急ひじれひなめづらしき今やうの一節をもうち
 きくをなんこよなう心はるくるわざとおもひて
 ちりくはにぎは、しう親の心をもとるなるべ
 し雲間の月のほのぐしうあやめのおひかせえ

んなる夜を郭公のなく一こ急もうしろのたうて
 くれはてぬより例のけさうびときつどひにけり
 との、うちよりつけ給へりけるめのわらはに瓶
 子とらしめて土器あまた、びめぐらすやうく
 たけなはになりてぞかげときがねぎことを母の
 せんどにしひられてせんかたなうあふぎとりて
 なんとちけるいそのせんどあづまをすが、くに
 かげときひざばうしとるすけつねはこ急いとめ
 でたかりければ今様うたよ

ありのすさびのにくきだにありきのあとはこ

ひしきにかりにも見なれしおしかげをいつの
 よにかは忘るべき思ひのことにいみじきはお
 やの思ひ子のおもひすぐれてげにいみじきは
 めものおもひなるものをゆる思ひはすくふ
 てふほとけの方便なりければ神のたすけした
 のもーやこ、けは必ずひびきあり仰げば必ず
 花ぞ咲く

となん下のおもひをすこしほのめかし出たりけ
 れど聞しられずなりぬるなん甲斐なかりける燈
 臺のきらしくしきにはえて蝶鳥などのねりいで

たらんやうに玉のかんざしをぬらかしうすもの
 のたもとをひるがへしてたちまふすがためもあ
 やにてまことに光るとはこれをこそ言はめとつ
 ねはかたちつくりやうだいめく人々もおのが目
 くちのならんやうをしも忘れてめであざみあへり
 景時はあまりにもめでして酒の急ひもさめは
 てにければ瓶子こひてひたのみのにみて人にも
 しひぞしいといたう急ひみだれにけりさらでも
 あるちいとゞしう舞のすがたに心たましむを奪
 ひはでられたるが上にかなづるごとにきぬのあ

はひよりしろうなよびかなるほそはぎのほのほ
 の見えたりしを忘れえねば今宵はことにこゝち
 ときめきしてむなでにかへられんものとおぼ
 えねど夜もふけぬなり今はまからんといふにせ
 んかたなうともにまがでにけれど道よりすこし
 やりてたちもどりにけりひとりせんざいのうち
 に忍びてきけばかの人のこゑにてあこやこよふ
 はまるがもとにふいたれといふはくいじとりー
 わらはなるべしおくのかたにしはぶきのおとす
 るはせんぞなめりとさくいさゝむら竹のかけな

りければ蚊といふむしのいとおほうむらがりき
 てさすわびーさをねんどてしばしまつにやうや
 うみなねにけりまきの板戸はさゝずしもあらぬ
 をやむらおしあけてかべを傳ひなごしてわな、
 くわな、くあめみよりたるふすまの手にさける
 は戀しき人のふし戸と思へばこはきかたきなど
 にむきたちたらんよりも、しう心おくれして
 むねなんといろくをしひてのどめてかいさぐり
 見るこゝはすそのかたなりけりうまいしたるい
 きざしをしるべにてやむらすべりいらんとする

にゆくりなう枕をふともたげてあやしこゝに何
 ならんといふ聲は母のせんどになんありけるあ
 さましうむくつけくてふてうにかた、がして
 けりとおもふにむねつぶれて人しれずにげかく
 ればやと思へばいとゞあやにくにてあしおとの
 ひしくとするを鼠ならんとおもひしはあらざ
 りけりいつもくる猫にやあるらんといへばさば
 其心にたがはじと思ひとねうくとまねびなく
 もいとしのび音なりいな猫あらざりけらし猫よ
 りはおほきう聞ゆるは犬にもぞあるといへばま

たわうく〜とまねぶもくるし
 いみやう行ひすましてたふとき大徳ありけり名
 をぜうしん僧都となんいひけることにいもがし
 うを好みて食ひければ世には芋頭の僧都といひ
 けり此僧都や鼻のいといたういかめしくて繪に
 かいたらん象の鼻などのやうにさきのかたの垂
 りて物くふにわづらはしかりければこんぎやう
 のときのしゆもくといふ物のかたちに鼻もたげ
 の木といふ物でうじいで、わらはをかたへにす
 るてこの木もてはなをもたげしめてなんをもの

くひければまたの名を鼻檜の僧都ともいひけり
 きすくにのみもあらざりけらしあるが中に一人
 こよなうらうたきものにしてめでうつくしむわ
 らはなんありけるかたちわづにそびやぎて物
 うちいひたるもなよめかしういさ、かも物々し
 きけはなくてつらつきわら、かにあいぎやうづ
 きてなんありければになきものに思ひ聞えてあ
 けくれかたはらはなたずかの鼻檜の木も多くは
 このわらはなんもたりけるをりくはこの木を
 とりはづして鼻をかめの中へうちはめなどとし

たりけれどいさ、かはしたなめなどもせずん
 ありければいといたう患ひあがりてよろづわれ
 はがほにさしすぐ寺のうちの何くれの事ども
 くちさがなう僧都につげなどしたりければある
 かぎりつまはじきをしてあばめにくみにけり僧
 都はいよ、うたがりてほしといふ物くれなど
 してけしきとりけりこのほどまうきにけるしぼ
 ちの法師の若うすくくしからぬがしんでんの
 ひさしのかたによるはねにけり僧都とは板戸ひ
 とへ隔ちていとかがかなる處なれば萬の物の音

など名残なう聞えにけりかのわらはに瓶子とら
 しめてかはうけさしかはし二人してのむなるべ
 しいもひならぬさかななども火をけて煮など
 するにやあるらんあやしき物の香などしてやが
 てともねをぞするこよひはすぐる寒うて酔ひて
 もなほつめたくぞあるやこちひたとよりねかう
 かいいだきてこそぬくめたいまつらめなどもい
 んはないきあらまほしうひたくともの、おと
 してかうては得いきたらじをあなよかなりやな
 どいひてうちうめきよ、となくはわらはのこゑ

なり口さしなむるおと紙のこぼくとおしまる
 かる、おとなどもすなりいとぶしうじほうなら
 ぬ若きこ、ちにこれを聞ふいて何かは身もすば
 ろけしからぬいたづらに物のたけうなりてそら
 さまにたてるを物におしすりおしあてなどして
 はてくはかへつるみをしてふすすもしといに
 けがしあへりかう夜毎くき、ふしつ、かのわ
 らはの面影をしひて目に浮べ口に名をずんどて
 かはつるみをなんしけるさんなん思ひけらくは
 かのわらはやもてつけてをのこめかしたれどじ

ちにはなほ女なるべしあの鼻のいかめしきに女
 ならずはいかであへましかつねてかたらふやう
 だいなどもこよなうねびてこそ聞ゆれけ、しう
 わらはと思はせて僧都のおもふ人すゑたるなめ
 りいでや女はあはくしかめるをつなひきこ、
 ろみてましと其いひよらんずるやうを心にふか
 うかうがへおきて、物のひましくに手をとらへ
 尻つみなどしてこ、ろむるにいなぶねならぬけ
 はひしてよりくしりめに見おこせなどする眉
 のかをりえんに嬉しなどいはんもさらなりやう

やうにならし聞えて僧都のものへゆきなごとして
 しばしも暇のひまあらんをうかゞひまつに
 いとあやにくにてやうくよごとくの睦れあ
 ひに身もよわうなりもて来てこゝちそこなへる
 けにもやあるらんあついでいもがしらをだに多
 く食はずなんりにければいとゞかたはらはな
 たず枕邊おとべにすゑて見とらするに心のみい
 られてかはやにゆくをめぐりなうとらへついで
 あなまさなうとも言はずひたぶるにおしまろ
 ばして足をひだりみぎりにおしひらめてまたが

りのらんとするにいといたうあわたゞしければ
 あやまちてひざかはらのふとさしあてられたる
 をあないたなどはいはでぬらくとすべり入り
 たるにあさましくてもしはしにぢどもやすると
 こゝちまどはれたるを女は事しなげにて僧都の
 ごもちにもをさくけおされさせ給はざりけり
 とや

筑波山うしはく神のむかしよりかゞふかゞひと
 よめりけんあがれる世の手ぶりをつたへて田舎
 人はよろづじほうにあすか河の淵瀬とかはりよ

しの山のはむにのみなりもてゆくめるよのたゞ
 ずまひにもうつらぎ代のぎしきとたいせちに
 傳へおきていさゝかもさくじりをよづけぬな
 ん神の御心なるらんとをかしめをふたはしらの
 おほん神の動きなき御心なからひはかけまくも
 かしこし國の名におよ常盤帯のかごとばかりに
 もあはまほしうみな河の淵とつとりわかう
 どどものつきごろのこひもこよひとよにはた
 すなるべしうもれいだきすくびとのおほぢのう
 まごのむすめいつきさうぞきて今宵ばかりはを

常盤は常
 陸の誤り
 なるべし

のこのかす多からんやうにとおしやり郡の大領
 のまなむすめをさへに稲つきてかゞれる手もて
 たはくるをも神のいさめぬならひになんありけ
 れば我つまに人もたはけよんづまにわれもたは
 けんといひけんやうにそこのをばやしにひきい
 れてせし人のおもてもしらずみちゆきびとをた
 れと知らねどたらちねの母がよぶ名をのるもあ
 るべし大原野のざこねといひけんにようしの物
 にてつぐま、つりの鍋のかずとてさよごろもい
 さめさせたまふおほん神の御心とはいとうらう

へなるかんわざぶりけりとあやしよみのほどこ
 そかうづくしうかんぬしはふりだつものいみ
 じきさほうどもどもありて道のかなたこなた
 ところせうしづくのたゐにかりあげしわせのに
 ひしぼりうばらもちひなどひさぐあしのまるや
 かくのあわまがりなごやうのからくだものうる
 あぐらどもどもごらうがはしうたてわたしたる中
 をあちおしこちおしをちこち人どものしりなる
 こにあかぶりなまれつゝなんねりありく髪のか
 かり古代めかしうさるがうの面かけたらんやう

に顔にきはぐしう白きものしてけもんれうの
 襟さまあしうことさらにもて出こき紫に紅梅
 のをりえだ小松ずりの衣のさゝぬぐしきまこち
 なうつぼさうぞきたるはさとのとねのおとよめ
 などにやあるらん色黒う鼻ひくらきてむかはま
 ばみたる男の殊更に手のおよびのいかめしうふ
 ときがあつごえたる衣のすそに山みもてすりも
 どろかしたるたへのほのさしぬきだつものはき
 たるは山賊の垣ほのうちのみこがねなどにもこ
 そあめれたれしくかすゆざけに急ひじれてこ

ちごちしうあざればみおぼどれたるこゑしてあ
 さんづの橋のとんどろくとかしがましううた
 ひの、めきなどもすめれやうくにあがれちり
 て筑波山のかのもこのもにかけを求めていなが
 らのあはひなどにかいひそみておのがじ、のす
 きわざどもする常はすくくしうじほうなりと
 見しきとの翁の隣のむすめのまだいとかたなり
 なるをとらへてひたぶるわざしておもほえずい
 ためてちにあえてわぶるもあればとしふりても
 いろめかしうなまめく姫のおい舌よみて若人に

あだえそぼる、もあめりあはひちかうこほく
 と紙のおしまろかる、おとなきみ笑ひみするこ
 ゑなどし名残なう聞えかけせばいとこ、ちと
 きめきして若人はことにくまなうあさりありく
 なりけりくらきかたよりふと袖をとらへて女
 つくばねのねろにかくれるすぎがてにいきづ
 く君をいねてをやらん
 となんいひかけたりければ男かへー
 いもがこといなとは言はどつくば山かくれの
 かたに袖はひきてな

といふくやちうそひふして口さなむれば女
 は手をのべてうなじにまとふなるべしみながう
 どはばうぞくに衣のかさねなどもはしたなきを
 もくつけうかいひろげてふとくふしたちたるお
 よびもてひなさきのおたりにおしすればひきい
 れ聲してとうくとすみやかるゝを猶しばしの
 どもてやうくにさし入るればようぞあるや家
 にあればねび人のいとかなしうちひさきが上に
 しづまひていとぶいふかひなきをよひくに口
 ちしきすくせもたりけりとぞんあかぬこちし

侍りつるを君がごもちのこよなうめでたきや身
 もとろぎでたへいるこちもし侍るかななど
 ことよがりてしりもたげうごめかせば男もはな
 いきあらくしうしていざとよまるこそはしこ
 めすくせをくいわたりかさだすぎ人にさくな
 んあなればかたましうものねたみをしてともし
 ればうけはしううちゑんするつらつきのみくむ
 くしくながう見はせんものとしもおぼえぬを今
 のあふせば神事とこそ思へ又のこよひをまちわ
 たらんはたなげたつめのこちもせんをいづら

もろともにはひかくれてつひのよるべとたのみ
 聞えんは如何はときしのぞけばいつはりのなき
 せなりせばといだきしめて心をとりうた
 おくかぎりむつれあひてかひなを枕にしばしあ
 だえてあるあひだに有明の月やうくさしのぼ
 りてこのまながらに顔のあざくと見えたれば
 あなかたはや心づきなうぞあるやわがせにてお
 はしましけりとわぶるにむねつぶれてめにてあ
 りけるよとあさましうあきたる口のせんすべも
 なきこちするを女はつきづーしいひなして

つくばねにゆきふれたるをいなをかちかぢ
 きころとおもほさぬかち
 とよみてなきけり

はやうおぢしまなひのはらからかひそ
かにうつしもて傳へたるやうくにか
いそこぢへるなともすくぢからねはか
くさまにはものしつるなりけりかぢら
すけしうよにもて出んとてのわさに
はあらすぢん

安政六年といふと一の秋

四阿のまやのつまやのあまりにと

すきくしとや人はおとはん

翰

墨

録

鍾

鼎

彝

